

終戦からわずか8カ月後、1946(昭和21)年4月のことである。原田製作所(山形市、現在のハッピージャパン)は家庭用ミシンの第1号機「ハッピーミシン」を完成させた。創業者の原田好太郎氏(1895~1955年)は本県機械工業界の礎を築き、後に「部品山形」と呼ばれる企業群の育成にも貢献した。

好太郎氏は戦前、木型屋を経て鋳物業を創業。帝国ミシン(現在の蛇の目ミシン工業)にミシンの鋳物部品とテーブルを納めた。40年には帝国ミシンとの共同出資で原田製作所を設立。戦時中は木製プロペラや弾丸を生産した。

戦後間もなく、下請けから脱却してミシンの完成品の製造に乗り出すことを決断。帝国ミシンの元技師長らを招いて設計図を作り、1号機を完成させた。スイスの時計のように日本のミシンを世界に広めたい。好太郎氏は輸出に力を注いだ。それが軌道に乗り始めた49年のミシン輸出台数は日本全体の約27%を占め、貴重な外貨を稼ぐ企業へと急成長した。

県内では原田製作所を中核にミシン部品の製造が盛んになり、関係者の中で「部品山形」と呼ばれた。地域全体の繁栄を望む好太郎氏は、30社以上の協力企業に他社との取引や新分野進出を促したという。その結果、多くの企業が飛躍を遂げ、現在に至っている。足踏みミシンの往復運動を回転運動に変える「ピットマンクランク」で高いシェアを誇ったエムテックスマツムラ(天童市)、布送りの機構部品を手掛けた石沢製作所(山辺町)、布押さえの圧力調整装置「ターナー」で



輸出伸ばし工業界の礎に

名をはせた片桐製作所(上市市)などがその代表格と言えよう。

好太郎氏の長男原田孝一氏(1924~2013年)は戦時中、旧満州の関東軍教育隊に入隊し、終戦後、2年余りのシベリア抑留を強いられた。極寒の強制労働で多くの仲間が命を落とす中、何とか生き続けて47年10月に帰国。父の早世により31歳の若さで2代目社長に就き、事業の多角化と国際化を推し進めた。

孝一氏は75年、北米出張の際に米シンガーが初めて販売したコンピューターミシン(1台約60万円)を目にし、電子化の到来を確信した。持ち合わせがなかったため取引先から借金をして2台を購入し、本気で分析。4年後に自社製コンピューターミシンを世に送り出した。国内メーカーでは2番目の早さで、孝一氏は「借金をしてまで買って来たかいがあつた」と開発陣の労をねぎらったという。

円高対策として台湾工場を開設したのは78年のことだ。孝一氏は全役員の反対を押し切って台湾進出を決めた。後に「あの決断を理解してくれたのは山形銀行の長谷川吉郎頭取だけだったが、台湾に行つて正解だった」と述懐している。

ハッピーグループは90年代、シンガーに対し、相手先ブランドでのミシン供給を開始した。2000年には同社の国内独占販売権を取得して今日に至っている。

本県ミシン産業の歴史

ハッピージャパンは今年7月、20年ぶりとなる自社ブランドのミシン「myc r i e」を発売した。14年に操業を開始したタイ工場が生産を担う。創業家3代目の原田啓太郎会長(68)は「ミシンの品質をもう一度徹底して追求してみたかった」と語る。購入したユーザーから「縫い目がきれいで音も静か」と高い評価を得ており、最上位機種は早くも品切れとなった。ものづくりに懸ける熱い思いは、世代を超えて受け継がれている。

論説委員 石井秀明